

# 続・家族理解入門

## 家族の構造理解・応用編

### 第8回

2019/09/15 版

団士郎



黒竜江省ハルビン 夜景

時代のトピックスになるような家族を取上げたり、世間を騒がす事件渦中の家族を、あれこれ語るのを専門家の仕事だとは思わない。「野次馬評論家」だと思っている。

みんなで大騒ぎして、誰も成果を上げられなくて、そのうち飽きてしまって、新しいネタに流れていく。こういう関心の持ち方をまったく評価しない。そんな時流に乗って登場する専門家や新技法も、「十年も経ったら分るよ・・・」と冷やかに見つめている。

だからといって傍観者が賢いかというと、そんなことも思わない。今、取り組まなければならないターゲットは、なれの果ての中流小市民意識の家族だ。だからそこに、取り組まなければならないことが山積みになるのだと思っている。

団塊世代と呼ばれ、バブルを経験し、今、高齢化社会の渦中であって生きる長寿者達が作り出している日本の家族。この高齢者問題に取り組むのではなく、この人達が築いてきた成果も、負の結果も含めて家族を見直さなければならない。

その典型が「引きこもり百万人」、「8050問題」と称された課題である。児童虐待へのピント外れなエネルギー注入と比べると、なんとまあ、引きこもりや8050、あるいは自殺者毎年二万数千人への熱の低さはどうだ。

私には世の中の問題解決に向けたテーマ選択が恣意的過ぎるようにつる。一億総中流と呼ばれていた家族の高齢化に伴う家族問題に、そろそろ本気にならなくてはと思う。

ここに症状中心の発想の取り組みはフィットしない。介護問題も、引きこもりも、非婚化も、少子化も、家族生活の日常である。だからその中心にあるのは一歩前進と、なにより予防である。

安易に「ゼロ」を口走るから専門家の仕事になってしまう。「出来るだけ少なく」を目指して、一定数の出現は引き受ける。これが賢明な社会というものである。そしてこの時、特定の人達にしわ寄せを负わせるようなことはしてはならない。

専門家はゼロを目標のところまで活動すればよい。それは限定した患者へのサービスメニューなのだ。「家族」は限定対象ではない。

一般市民である人達が、日常的に起きる問題に、自ら取り組むのは当然である。何かあったら直ぐ、救急車を呼んでしまう人を、用心深い人とはいわない。事態が含むリスクも吟味した上で、主体的総合判断として「しばらく様子を見てみよう」とか「直ぐ、救急車を！」と決める。

これは、なんでもすぐ大げさにしてしまう人や、ひたすら我慢強い人、等という個人の性格話とは違う。人の行動はしばしば、状況への対応ではなく、その人固有の行動様式に流されていく。だから、物理的には誰にも平等に起きているはずの事態が、その問題への対応のあり方故に著しい個人差を生んでゆく。

人は皆、どこかで誰かに育てて貰って、大人になる。ほぼ、そうである。その育成プロセスが様々な特徴を持つことはいままでもない。良い、悪いではなく、すべての場所がそれらしい癖を持っている。それを体得することで初めて、一般的な人から、個別性と生育歴を抱えた一個人になると言ってもいいかもしれない。

そこに課題が発生しているのである。出来事そのものは、社会状況や時の習慣に沿って千差万別に発生する。そんなもの一つ一つに対応していても、流行を追う軽薄なファンの域を脱することは出来ない。

だから私達は、そんな中にある普遍性を一定持ったものの見方にこだわる。それがここでは家族の構造である。構造的特徴は、問題行動によって引き起こされるものではない。とくに課題を抱えては居ない家族にも構造的特徴は存在する。だから症状を抱えることになった家族にも、それ故ではなく、一般的な観点から、どのような構造特徴を持っているのかを吟味をする。そこに登場する基本尺度が「境界」「サブシステム」「パワー」だというわけだ。

## 八 パワー ①「決定」

家族の持つパワーは、多岐にわたって様々に取り出し、論ずることができるテーマである。ここでは、「決定」、「権威とコントロール」、「金」、「暴力」の四分類で、パワーの行使が日常的に行われる家族のスタイルを考える。

家族内におけるパワー行使は、良いか悪いかは関係なく、パターン化して繰り返されていることが多い。課題に直面しているのに立ち往生していたり、堂々巡りの渦中にあると感じた時、そのパターンの明確化と、変化のためのプランを考えるのが、「パワー」を考察する理由である。力の発揮され方が誤っているから、問題が解決出来ないのだと考える。

別の言い方をすると、問題が問題なのではなく、問題解決方法が問題なのだという事になる。

### 命名

私がトレーナーを務める家族理解ワークショップで行う面接実習では、名付けのプロセスを扱うのが定番の一つである。初回面接において、来談者のパワー行使パターンをモニターするのに、このテーマはうってつけである。

以前どこかの誰かが、「家族療法をするのに、名付けの話なんて必要ないよ」と言っていたと聞かされた。そんなことは当たり前だが、そう言った人も、それを伝えてきた人も、面接で名付けを扱うことで、何をしているのかが分かっているなと思った。

姓名判断ではないのだから、名前そのもののこと

など、どうでもいいことである。

とは言うものの私、個人的にはわが子の名付けにはこだわった。名は体を表すというのを信じているところがあるし、名前に負けないように生きようとする人も少なくない。名前は重要であるが、家族療法と直接関係はない。

それにしても、人の名前が必ず誰かによって付けられているのはなかなか興味深いことだ。「ゴッドファーザー(名付け親)」という名誉ある役割としての位置づけが確立している場も多い。

ビジネスの世界や商品開発の領域でも、ネーミングが非常に重視されていることは、知っている人も多いことだろう。ネーミング一つで、性能や効果と関係なく、売れ行きが大きく違ったりするのである。

売薬新商品は「ン」の字を含んだ名前がよいと聞いたことがある。リポビタンとかアリナミン、グロンサンなど。ちなみに私は「ダン」である。(私は薬か！アハハ、そういう風邪薬もあったな)。

ところが、わが国の子どもの名付けは、わりに安易なところがある。その時々流行の名前があり、好まれる漢字がある。付けられた名で生まれた年代がおよそ予想できたりする。よく言えば親の意志による名付けが自由な、別の言い方をすれば、悪ふざけも含めて、暴走族のネーミングのようなことも許容範囲の家庭行事になっている。

昔のニュースに、両親から『悪魔』くんと命名された子どもの話があった。役所が受理するかどうかで世間を騒がせたりした。

### 名付け方

名付け方において、いちばんポピュラーなのは両親が二人で相談して決めるものである。データの根拠はないが、平成以降、加速度的にこの傾向は強まったように思う。

それ以前の名付けの標準メニューを書いておくと、(1)名前は父親が付ける一群。(2)逆に母親が付ける群。(3)そして先に書いた両親二人で考えて付けるもの。(4)親族縁者の誰かが名付け親として登場するもの。両親どちらかの親たち(祖父母)が名

付け親の人も少なくない。

ここには少なからず、名付けた孫は可愛く思ってくれるだろうという両親の期待も潜んでいる。

名作映画「ゴッドファーザー」において、名付け親にドン・コルレオーネをと願う親たちは、子どもの生き残り戦略として命名権を差し出している。

日本社会の家制度など今はもう幻だが、その幻影の中だからこそ、名付け親という行為に、意味を見いだしたがる心情が家族にはあるかもしれない。

(5)そして最後に、尊敬する人、姓名判断の識者、権威者など、社会的影響力を持つ人への命名依頼がある。

親になった者はこんな中から、自分たちの名付け行動を、それほど意識的ではなく選択してきた。

しかしこれも先にも述べたように時と共に変化を見せている。これからも新たな時代的变化と連動してゆくのだろう。自由な決定の出来る今だからこそ、家族の特徴だと言っていい決定方法が選択されている。多くが両親になった二人で相談して決めたと答える人が増えたことから見えるのは、今日日本の家族の中心は「夫婦(カップル)」だということだ。

### パターン化

家族の採用する「決定方法」はしばしばパターン化して繰り返される。子どもの名前を占い師に頼んだ人は、住宅を購入するときにも方角や風水などを観てもらいに行ったりするだろう。

どちらかの実家の親が名付けた家族では、「郊外の戸建てを購入しようと思うのだが…」と再び夫婦で相談に行っているだろう。

子どもの名前は夫婦二人で決めたと語る両親は、その後の人生の選択や、決定行動においても、同じように繰り返してきている可能性が高い。

これを支える背景は、先行するパターン(この場合名付け)が上手くいったという自覚である。何が上手くいったのか明確ではなくても、上手くいったと思えていることが重要である。そして人は、上手くいったことは繰り返す。これが基本である。

では、もし上手く行かなかったと思った時、人はどう

するだろう。実はここが「決定」の少々やっかいな点である。人はしばしば、上手くいっていないにも関わらず、又同じ事を繰り返す。ムキになる傾向の人もあるし、今度こそはと意気込む人もある。

変更すれば、それは前の自己決定の過ちを自覚することになる。それが悔しいと思う人もある。

このように客観的には理屈が通らないと思われる選択をしてしまうのが、パターンに呑み込まれた人の在り方の一つである。これを訳が分からないと切り捨てるか、だから人間は面白いといつかは自由である。

初回面接では名付けのエピソードなどを聞きながら、家族の決定パターンに当たりをつけていく。無論、大して興味をひくような特徴がなければ、さっさと他の話題に展開していけば良い。もっと顕著で、興味深い決定プロセスが見えたら、名付けの話題にこだわることはない。

そして、他にもきつとたくさんあるだろう家族の決定事に関するエピソードを確認しながら、その家族の現在の問題に向き合ってきたパターンを見立てる。

## 進路

家族それぞれの顕著な決定の一つに、子どもの進路選択がある。「小中学校お受験！」も、「母が出身の女子校に娘も！」というも、その家族の持つ文化に他ならない。

子どもの学校選択は、特に積極的に行う必要のない地元公立校以外は、様々な決定プロセスを抱えているものである。

進路選択に関する両親の発言力差や、偏差値依存、受験への傾向と対策の取捨選択に、家族の価値観を踏まえた決定が見える。

医学部を目指させている一家(医者の子ともとは限らない)の不登校相談に、いくつか接してきたが、近年時々、世間を騒がせる家庭内事件の匂いも少なからず感じた。

また職業の選択、決定にも、不況が続いた時期には、「どこでも良いから内定がもらえるなら・・・」などと志の低い親の発言も登場する。

しかし多くは、やり甲斐、安定、資格、高収入など、個人差の大きい目安で、極めて個別化されて選択実行される。これを支えているのが、家族の持つ価値観に裏付けられた「決定」である。

気づいている人も多いと思うが、近年の顕著な傾向の一つに、親の職業の継承がある。職業選択の自由を謳いながら、親と同じ仕事を選ぶ(選ばせる)家族が少なくない。

それを伝統芸能一家とか特殊な職人の世界、あるいは自営の個人商店(魚や、八百屋、食堂など)のイメージでいると、とんだ見損ないである。

先ず、政治家(議員)が顕著にそうである。民主的選挙で選ばれているはずの代議士が、親子揃ってとか、三代目だったりする。歌舞伎役者の世襲制か！と突っ込みたくなったりする。でもそう言っている一般家庭でも、医者の子は医者だったり、教員の子が教員だったり、公務員の子は公務員だったりする。

ちっとも選択の自由を行使しない世の中になってきつつある。私はこの傾向自体が大きな問題だと思うが、個別化すると「それも個々人の自由だろう」と言われて膨大な現実の中に紛れてしまう。

「違っだろう、個人の選択の自由だといって、みんなが同じようなことをしてしまっていることが、いちばんの問題だ！」と私は思っているが、こんな声は少数派でしかないのだろう。

## 配偶者選択

決定に家族以外の他者が大きく関与してくるのが配偶者選択である。長寿TV番組「新婚さんいらっしゃい」ではないが、結婚の経緯にも、人はたくさん選択と決定をしている。

先ず、結婚するという決心がある。相手があっても、なかなか結婚に踏み切れない男女が増加している現実を背景に、どうして結婚という決断に至ったのかを聞いてみると、興味深い事実にもぶつかることも多い。

そしてここに「出来ちゃった婚(おめでた婚)」という一群が存在する。この、明確な結婚の決意はなかったが、結果は尊重するという姿勢。受動から発した能

動性だが、今日社会の特徴的行動選択のひとつである。現実としてそういう選択があることは容認した上で、一つ述べておきたい。

ここには結婚に対する主体的選択が欠けている。結婚はある時期の決断事項だが、その後の結婚生活は大小の「決定」の繰り返しの日常である。そこに立ち向かうカップルの決定パターンが、結果に押し切られたモノでしかないと、受け身の被害対策しかパターンがないことになる。

「必ず避妊する」、「未婚の母を選択肢に見据えている」、これらには結果に対する事前の選択意思がある。例外だろうが、芸能人には諸事情が片付かないので決断できないが、妊娠してしまったら、みんなのあきらめもつくだろうという戦略的決断もある。

### Aさん

五十三歳になる公務員の相談である。

異動した職場の仕事がはかどらない、やる気が出ない。上司からも心療内科かカウンセリングにでも行ったらどうだと言われてきたという。

今春移ったばかりの、これまでとは畑違いの業務。部下が一人いるが、あまり仕事が出来ない。

「仕事は結局、自分が二人分かぶってしまうような状態で…」と話し始めた。

本人に病気だと思う気持ちが強かったら、心療内科かメンタルクリニックと掲げたところに行っただろう。人は自分の状態について、これまでの経験を踏まえて自己診断をして行動していることが多い。

昔のように、「精神神経科と書かれた看板の敷居が高くて…」と語る人の激減した今である。心療内科の看板をあげることで、内科表示の時の数倍の患者が来るようになったと嬉しそうに語る医者のある時代だ。

無論、本人の見立が必ず正しいということはないが、正誤もその程度のものだと覚悟するのも大切な事だ。

学校で一寸問題があると直ぐ、専門医に発達診断をして貰えと親をそそのかす「発達障害オタク」教員は、人間の主体性育成を蝕んでいる。

何でもまず検査、診察、エビデンスをと振り回す近年の「身体・脳」至上主義には距離をおくことが大切だ。

誤りだといっているのではなく、こころか体（脳）かというのは、右に左に今後も揺れ続ける時代のムーヴメントにすぎない。そして結局のところは、自分の人生なのだから、自分で決めて良いのである。

「病気だと思うなら医療機関に行けばよいし、そうでないと思うなら、ここで出来ることをしましょう」、これが私の基本的な姿勢である。必要だと思うなら、両輪で走ってみることも可能だ。

『心の風邪』なんてコピーライターの診断に乗った自分を、うかうか語るのは用心した方が良い。これが私のスタンスである。

### 面接

初回、本人の訴えをしばらく聞いてから、定番で家族の概略を聞いた。

「今日初めてお目にかかるので、ご家族のことを少し聞かせてください。」

「母が入院中です。八十九歳になります。もう七年ほどになるのですが、無理を言って入院させてもらっています。」

父は十八年前に亡くなりました。私が三十五歳の時です。兄弟は居ません。結婚はしていないので現在一人暮らしです。」

「では七年前にお母さんが入院されるまで、二人暮らしだったということですね。今、お一人ということですが、仕事以外の日常生活を教えていただけますか？」

「昔は好きでよくテニスをしていました。学生時代からずっとです。しかし四十歳過ぎくらいに、なんだか楽しくなくなって、テニスクラブも職場のサークルも辞めてしまいました。」

酒ですか、ここ二年ほど、飲みに行かなくなりましたね。あまり行きたくなくなりましたのです。」

これは何の問題なのだろうと思った。そして逆

に、こんな環境条件で意欲的になる動機を、人ほどのように紡ぎ出せるだろうと思った。

「今何か、趣味というか、好きでしておられることはありますか？」

「特にありませんね。異動があつてからは慣れない仕事で疲れますし、休日は寝ていることが多いですね」

少し雑談風に家族歴を聞いてみた。

「いや、三十代後半までは、結構母があちこちから見合い話を持ってきてね。でもその頃、これといって不自由もなかったし、ワガママ言って断つてばかりいました。今考えると身勝手なことですが・・・」

「さしあたり、どうなれば今より少しは楽になりますか？」

「母が良くなって退院してくること・・・は、ないですね・・・。それはもう仕方ないことです。もう少し仕事の出来る部下が、次の人事異動で来てくれたら、多少ましですかねー」

「じゃー、それが望みだと言うことですか？」

「・・・違いますね・・・。そんなことが私の希望であるはずないですよ・・・」

\*

結婚をしなければならないとか、家族を持たねばならないとか、そんな決めつけをする気持ちはさらさらでない。多様な人生が展開されることが、世の中の健康さだと考えている。

そして多様な中の少数派で生きようとしたら、力があることも知っている。人は皆、自分の力量をどこかで感じとっているものである。だから力不足だと思う人は、世間の流れに乗っかって、同調行動しておくのが無難だと知っている。

適齢期に結婚し、ほどほどに一人、二人の子をもち、家族を営む。そうしていれば、同世代の人たちと共に、そこそこのノルマと、それなりに充たされた人生は手にはいる。まったく普遍性などはないが、現実とはそういうものである。

### たらの話

彼がもしワガママなことを言わずに、ほどほどの歳

で家庭を持っていたら、今頃悩みは、子どもの進路問題や学費問題、少々の夫婦不和問題だっただろう。

これまで専業主婦できた妻が、息子の学費を考えてパート就業する問題とか、祖母の介護に関する夫婦協議だったかもしれない。そういう話をしなければならぬ渦中の人が、ウンザリはしていても、何にも意欲が持たなくて悩むことは少ない。

通俗的な言い草だが、「そんなことは言ってもらえない！」という状況で、そんなことを言っている人に会うことは少ない。そんなことを言っている人はたいてい、そんなことを言ってもらえる条件を確保している。

むろん、そうなれない自己破壊的な状態の人もあるが、それを一般化するのには少数をもって、多数を語ってしまうことになる。人間はなかなかしぶとい。この事実を軽んじてはいけない。

彼は自分を誤解していた。世間には、ヨーロッパの貴族のように、一生ポロやテニスやチャリティーをしていて飽きない人もあるのかも知れない。(ほんとかかな?)しかし平凡な日本人の彼は、テニス仲間が皆、子育てや家庭事情で倶楽部を脱会していくのを見ているしかなかった。そして残された彼が、一世代、二世代歳下の人たちと、いつまでもテニスを楽しむことは出来なかった。詰まらなくなってしまったのである。

多くのサラリーマンが、ある時期になると、郊外の一戸建てで広告チラシが目がいったり、単身赴任を受け入れるのも、出世話との天秤で、脱サラ指向を語るのも、同世代(団塊世代とそれ以降20年くらい?)の同調行動である。

彼はその輪から、見事に外れて五十歳を超えた。酒の席もそうだったようだ。同世代人が新たなステージに向かう季節には、自分もその風の中にいられる方が楽である。

アルコール依存症にはならないで済んだAさんだが、なにも夢中になれるものがなくなってしまった。仕事のやり甲斐も、機械的人事異動の前にはもろかった。己を鼓舞するために必要な、年相応のネタが尽きたのである。

## 黄昏の中で

決定保留が現状維持などではないことは自明である。株価や世界経済のように、待っていれば、又回復することもあるだろうとか、もっと悪くなるかもしれないという、二者択一の可能性ですらない。

明らかな身体病は別だが、様子を見ましょうなどと安易に言ってしまうのは、責任を取る気のない人だけである。人は刻々歳とっていき、体力も今より落ちる。それを引き受けても手に入るものが大きいと確信できるときだけ、見守りは有効である。

それ以外の様子見は、長期化すればするほど、回復不能な脱落感、置き去られ感にさいなまれてゆくことになる。

心理臨床をやっている者なら誰も、そんなケースはいくつも見てきたに違いない。それにも関わらず、様子を見ましょう、見守ってあげましょうと言ってしまえるのは、無責任なのか無理解なのか。いずれにしても、ヒューマンサービスの一翼を担うものとして、来談者への責任を果たしているとは言えない。このような援助職者の特徴が「決定回避」である。

弱っている多くの人の共通点の一つは、現状を誰かのせいだと思いつめていることだ。確かにそうなのかも知れない。しかし、他人や世の中がそう簡単に変わるものか？いくら誰が悪いと指摘したところで、それが自分を助けることは少ない。むしろ、悪いと名指されたところからの反撃に遭うことだってなくはない。

目標を見失って、誰かを責め立てているのは不毛である。くわえて、本意ではなかった過去だとしても、そこに執着してしまうのも又、自分を助け出せない方法の一つである。

そんなこんなを、あれやこれやと話しあった。すると彼が、「今からでも家族を持った方がいいですかね…」と言った。

私は、「現状も苦しいだろうけど、そう決心して相手を探したりするのも大変ですよ」と答えた。そして、「まあ、どの大変さに手を出すかは、みんな自分で決めておられるのかもしれませんがね」と話した。

「決定」はとても大きな人生の要素である。それによって主体性の在り方を問われている。そこでは常に、結果責任を覚悟することが求められている。